
真・恋姫†無双～大空の子供～

ZERO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫十無双〜大空の子供〜

【Nコード】

N4668S

【作者名】

ZERO

【あらすじ】

未来の戦いから数年後、ボンゴレ十代目ボス・沢田綱吉は笹川京子と結婚し、息子の沢田家宣が生まれる。そのさらに十数年後、16才になった家宣は自分の守護者を選ぶための旅に出る。しかしその途中で鏡を持った白い服の少年に出会う。鏡が割れ、家宣は光に包まれた。気がつくくと、そこには荒野が広がっていた。そこで家宣は三人の少女と出会う。

主人公設定

名前

さわだいえのぶ

【沢田家宣】

年齢

【16才】

属性

【大空】

ボンゴレファミリー十代目ボス、沢田綱吉と笹川京子の間に生まれた息子。時期ボンゴレ十一代目候補。

容姿は綱吉似だが、笑顔は京子に似ている。

幼い頃から獄寺や雲雀や骸などに囲まれて育ったせいか、好戦的な性格をしている。だが綱吉譲りの根本的な優しい性格と京子譲りの天然は変わっていない。

知識の方も獄寺に色々と教わっているため、中々の切れ者。

同じく幼い頃からリボンやコロネロ、守護者全員から鍛えられていたため戦闘能力はかなり高い。戦い方は綱吉のXグロブを始め、山本の時雨蒼燕流や了平のボクシング、さらには弓、トンファー、槍なども使いこなす。

なお、所持している匣にはそれぞれの守護者が愛用している武器を
収納している。(刀や弓など)

始まり（前書き）

恋姫の小説は初めてですが、頑張ります。

始まり

「ふう、疲れた〜」

イタリアの某所。

誰もが寝静まっている深夜。イタリアの小さな町で一人の少年が小さく呟いた。

「とりあえず今日はここら辺で寝床を捜すか」

少年の名前は『沢田家宣』

イタリアの大マフィア・『ボンゴレ』の十代目ボス、『沢田綱吉』の息子であり、時期十一代目ボス。

そんな少年が何故こんな夜中に出歩いているかと言つと、それは数日前にさかのぼる。

数日前・イタリアのとある豪邸。

家宣は目の前にいる自分の父、沢田綱吉と向き合っている。

「急に話があるだなんて、一体どうしたんだ？」

「……父さん……実は……」

少々迷った素振りを見せる家宣はやがて意を決したようにしっかりと綱吉を見据え、口を開いた。

「旅に出ようと思うんだ……俺の守護者を見つける旅に……」

「……………」

家宣の言葉を綱吉は黙って聞いている。

「いや、ファミリィに相応しい人がいないわけじゃないんだ。このボンゴレファミリィには確かに優秀な人たちが沢山いる。だけど……」

家宣は一呼吸置いて……

「父さんは獄寺さんや山本さんとは最初は友達だったんでしょ？雲雀さんや骸さんとも、最初は対立していたけど、今は父さんの信頼できる守護者だ。……だから俺は、世界を回って、色んな人に会ってみたいんだ！色んな人に会って、話をして、そして心から信頼できる守護者を見つけないだ！……一人は、もう決まってるけどね……」

「……そうか」

家宣の話を聞いた綱吉は頷くと、座っていた机の引き出しから何かを取り出した。

「なら、これを持って行け」

「え！？」、「これって……！？」

綱吉が出したものに家宣は驚愕した。

「ぼ、ボンゴレリング!?!?」

そう、それはボンゴレファミリーのボスと守護者の証であるボンゴレの秘宝、七つのボンゴレリングだった。(因みにボンゴレリングは原型オリジナルです)

「こ、これはスゲエ大切なモンだろ!?!?なんでそれを……」

「いいからもって行け」

「え!?!?り、リボーンさん!?!?」

部屋に入って来たのは、ボンゴレの中で最も信頼されている世界一のヒットマンであり、マフィア界最強の赤ん坊、通称アルコパレーノの一人、リボーンだった。

「俺もツナも、お前の考えていることは前々からお見通しだぞ」

「え?」

「お前の性格なら、俺たちが選んだ守護者より、自分で守護者を選びたがると思ったからな」

「守護者を選ぶなら、このリングは必要だろうか？」

「父さん……リボンさん……」

「それと、日本にいる京子から伝言を預かっている」

「母さんから？」

「ああ、『気をつけて行ってらっしゃい』だそうだ」

「っ!?!?」

綱吉やリボンだけではなく、母親の京子にまで自分の考えを見透かされていた家宣は、自然と目頭が熱くなった。

「行って来い、家宣」

「はい……父ちゃん」

現在

「さて、そろそろ寢床を見つけないとヤバイかもな」

今夜の寢床を捜して町を歩き回る家宣。すると……

シシシシシシシシシシシシ……

「っ！？なんだ!？」

近くで突然非常ベルのような音が鳴り響く。それに気付いた家宣は、急いでその方角へ向かった。

「ここは、美術館か？」

ついた先は、美術館だった。そして家宣は美術館の周りを見渡していると、美術館から出てくる一つの影に気がついた。

「そこか！」

家宣は素早く動き、影の前に立った。その影とは、家宣と同年代くらいの白い服を着た少年だった。

「ちっ」

「テメエだな、この騒ぎの犯人は。その手に持っているヤツはここ

から盗んだモンか？」

家宣は少年の持っている鏡を指差して言う。

「……貴様には関係ないことだ」

「そうかよ。なら、力づくで聞き出すしかねえなあ」

そう言つて家宣は戦闘の構えに入る。

「ちっ、失せろ！」

舌打ちをして家宣に鋭い蹴りを放つ少年。

「（速いな。だけど……）」

ガシィッ！

「なっ！？」

家宣はそれを片腕で受け止める。

「雲雀さんよりは全然遅い！」

反対の手で拳を作り、少年に殴りかかる。

「ちいっ！」

それをギリギリで避ける少年。しかし……

パライイイイイイン！

避けた拍子に鏡を落としてしまい、鏡は割れてしまった。

「あーあ、やっちゃったなあ」

家宣がそう言った瞬間、鏡から強烈な光が放たれた。

「な、何だ!？」

突然のことに戸惑う家宣。

「外史の扉は開いた」

少年が言う。

「外史? どういうことだ?」

「その眼で見るがいい、この世界の真実を……」

その言葉を最後に、家宣は意識を失った。

じぶく

桃園の誓い

「っっ、っっん……」は？」

目が覚めた家宣は辺りを見回した。そこには、広大な荒野が広がっていた。

「どこだここは？俺は確か、イタリアの町に……アイツは！？」

そこで家宣はあの少年のことを思い出し、辺りを捜すが、そこには荒野が広がっているだけだった。

「いない……か。そうだ荷物！」

家宣は慌てて持っていた荷物を確認した。

「……よかった、ボンゴレリングに匣兵器もちゃんとある。それにしてもここは……？」

家宣はもう一度辺りを見回す。しかし何度見ても荒野が広がっているだけで、先ほどまで自分が居た場所とは思えない。

「守護者探しどころじゃねえよ。どうしたもんかなあ……」

家宣が途方に暮れていると……

「あの〜」

「ん？」

突然声をかけられ、家宣が振り返ると、そこには三人の少女が立っていた。

一人はピンク色の髪におっとりとした雰囲気少女。もう一人は綺麗な黒髪をサイドテールにして凛とした雰囲気少女。最後の一人は赤い髪にトラの髪飾りをした小さな少女だった。

「えっと、君たちは？」

「あ、私は劉備。字は元徳って言うの」

「私は関羽、字は雲長だ」

「鈴々は張飛なのだ！」

「……………はい？」

出てきた名前に、目が点になる家宣。

「（劉備に関羽？それに張飛って……………それって三国志に出てくる人たちの名前だよな？ってことは俺はタイムスリップしちゃったのか？いや待て、そもそも劉備って男じゃなかったっけ？）」

「あ〜」

「っ！あ、ゴメン！」

しばらく考え込んでいた家宣は劉備に声をかけられて我に帰る。

「それで、劉備さん……だっけ？ここはどこなのか教えてもらえな
いかな？」

「ここは幽州啄郡。五台山の麓だ」

と、劉備の代わりに関羽が答える。

「（五台山……：そう言えば獄寺さんに教えてもらったことがあるな
……：ってことはやっぱり俺はタイムスリップを……いや、劉備と関羽
が女つてことを考えると、パラレルワールドと思った方がいいな）」

「ねえ、次は私が質問していい？」

「ああ、どうぞ」

「お兄さん、この国のこと何も知らないの？」

「ああ、正直どうしたもんかと悩んでいるところだ。まったく、守
護者を探すために家を出たはずなのに何でイタリアからこんな所に
飛ばされているんだ？まあ、リングや匣やグローブとかが無事だっ
たから良かったものの……」

と、家宣が一人愚痴を言っている……

「やっぱり……思った通りだよ！愛紗ちゃん、鈴々ちゃん！」

劉備が大きな瞳をキラキラさせて身を乗り出していた。

「この国のこと全然知らないし、りんぐとかぐるーぶとか私たちの知らない言葉を使ってるし、何よりも服が変！」

「……………」

そう言われて家宣は自分の服装を見る。現在着ている服はレオン特製の黒いスーツなのだが、彼女たちにとっては珍しいようだ。

「この人、きつと天の御使いだよ！この乱世の大陸を平和にするために舞い降りた、愛の天使様なんだよきつと！」

「管路が言っていた天の御使い。……あれはエセ占い師の戯言では？」

「うんうん。鈴々もそう思うのだ」

「でも、管路ちゃんが言ってたよ。東方より飛来する流星は、乱世を収める使者の乗り物だーって」

「ふむ……確かに、その占いからすると、このお方が天の御使いと
いうことになりますか……」

「でも、このお兄ちゃん、何だかゼーんぜん頼りなさそうなのだ」

「(なっ…!)」

張飛の言った言葉に家宣は反応する。

「うむ。天の御使いと言うわりには、英雄たる雰囲気あまり感じられないな」

関羽のさらなる追い討ちの言葉に家宣は……

「ほづ……言ってくれるな、小娘どもが……!」

と、低い声で言った。

「「「っ！?!?」」」

眉をピクピクと動かし、怒気を露にした家宣に三人はビクツと体を震わせた。

時期ボンゴレ十一代目ボスの家宣にとって、『頼りない』『英雄たる雰囲気がない』は侮辱に等しかった。

「本当に頼りないかどうか……今ここで、試してみるか？」

と、家宣は鋭い目つきで三人を睨む。

「（このお兄さん……さっきまでとまるで別人だよ……）」

「（身体が震える……！この私が、怯えているというのか!?!?）」

「（「っ、怖いのだ……）」

家宣のピリピリとした雰囲気三人は身体を震わせる。それを見た家宣は……

「……すまなかった」

と謝罪した。

「「「え?」「」」

突然の謝罪の言葉に、三人は呆然とする。見ると、家宣からは先ほどの怒気はもう感じない。

「いや、怖がらせるつもりはなかったんだ。さっきから予想外のことばかり起こって、イライラしていたのかもな……本当にすまない」

そう言ってもう一度謝罪する家宣に三人は顔を見合わせる。

「愛紗ちゃん！」

「はい。先ほどの言葉、訂正しましょう。この方こそ、天の御使い」

「鈴々もそう思っただ！」

と嬉しそうな声で言うと、家宣に向き直る。

「えっと、お兄さんの名前は？」

「ああ、まだ言っていなかったな。俺は沢田家宣。よろしく」

「はい！天の御使い様、この乱世を終わらせるために、一緒に頑張りますよー！」

と笑顔で言う劉備。そんな劉備に対して家宣は……

ドスッ

「痛い!？」

チョップをお見舞いした。

「な、何するんですか!？」

「いや、何か勝手に話を進められていたからつい……ってか、天の御使いつてなんだ？」

頭を押さえながら涙目の劉備に軽い罪悪感を覚えながら家宣は三人に質問する。

「この乱世に平和を誘う天の使者。……自称大陸一の占い師、管路の言葉です」

「乱世？」

「今の世の中のことなのだ。弱い人たちからたくさん税金をとって、

好き勝手しているのだ。それに盗賊たちも一杯一杯いて、弱い人を苛めてるのだ！」

「そんな力無い人達を守ろうって立ち上がったのが、私たち三人なんだよ。だけど……私たち三人だけの力だけじゃ何も出来なくて……」

と、ここまで三人の説明を聞いた家宣は……

「（……似ているな。父さんから聞いた、初代ボンゴレ……？^{フリーモ}世の話に……）」

そう、三人の話は、ボンゴレの創始者・？世の話と酷似していた。

「んで、その占いを信じて此処に来てみたら、俺が居た……と」

「はい。そして、先ほどの貴方の雰囲気を見て確信しました！貴方こそ、この乱世を治める、天の御使いだと言う事を！」

「そう言われてもなあ……」

唐突な話にポリポリと頭を掻く家宣。

「じゃあ聞くが、仮に俺がその天の御使いだとして、お前らはどうしたいんだ？」

家宣がそう聞くと、三人は顔を暗くする。

「……私たちは弱い人たちが傷つき、無念を抱いて倒れることに我慢が出来なくて、少しでも力になれるのならって、そう思って今まで旅を続けていたの。でも……三人だけじゃもう、何の力にもならない。そんな時代になってきてる……」

「官匪の横行、太守の暴政……そして弱い人間が群れをなし、更に弱い人間を叩く。そういった負の連鎖が強大なうねりを帯びて、この大陸を覆っている」

「三人じゃ、もう何も出来なくなっているのだ……」

「……ふむ」

と、ここまで聞いた家宣は思案顔になる。

「なるほど、そこで天の御使いが……いや、天の御使いの“肩書き

”が必要ってわけか「

家宣がそう言うと、三人は驚いた顔になる。

「簡単な推理だ。いくらそこらのしょぼい賊を倒そうが、そこで得られる評判はたかが知れている。つまり、お前らに必要なのは人を惹き付ける名声・風評・知名度ってわけだ。本来ならそれを積み重ねるべきなんだが、そんな悠長なことを言っていられる時間はないってことが「

「……その通りです「

苦々しい顔をする三人に、家宣はある質問をぶつけてみる。

「お前らは、この世の中をどうしたいんだ？「

家宣の質問に、劉備は顔を俯かせながら答える。

「私は……誰もが笑って暮らせる、平和な世の中にしたい！皆を幸せにしたいんです！「

そう答える劉備に、家宣は眉をひそめる。

「それが……どんなに大変なことかわかっているのか？」

「え？」

「俺の居た世界……お前からしたら天の世界か。俺はそこではかなり大きな組織に所属していた……」

家宣の話を三人は黙って聞いている。

「俺はそこで色々な所を見てきたが、平和な国もあれば、毎日が命がけの戦いをしている国もあった。俺たちはそれを止めようと必死になって戦った。だけど、平和な国を作れば作るほど、人が、仲間が死んでいく。なのに、戦いは無くならない……無くなったとしても、ほんの一時的だけだ」

「「「………！」「」」

家宣の話に三人は身体を強張らせる。

「劉備、関羽、張飛。お前らにはあるか？どんな困難が待ち受けていようと、どんなに絵空事だろうとバカにされようと、その信

念を貫き通す。その“覚悟”はあるか!？」

家宣の力強い問いに、劉備は……

「「あります!!!」」

「あるのだ!!!」

と答えた。

「確かに私の目標は大変かもしれない、絵空事かもしれない!それでも、これが私の夢だから……」

「そして我らは桃香様の刃!我らの邪魔をするものは、全て薙ぎ払って見せます!」

「鈴々も頑張るのだ!」

涙ながらに答える劉備と、その覚悟に答える関羽と張飛。家宣はそんな三人に歩み寄り……

ポンッ

と優しく劉備の頭を撫で始めた。

「お前たちの覚悟……見せてもらった」

家宣はそう言いながら優しく微笑んだ。

「俺で良かったら、力になるう」

家宣がそう言うと、三人の……特に劉備の顔が明るくなった。

「本当ですか!?!」

「ああ、これからよろしくな」

「はい!ありがとうございます!」

本当に嬉しそくに頭を下げる劉備。そんな劉備を見た家宣は、微笑みながら、天を仰いだ。

「（父さん……守護者探しの旅に出たはずが、なんだかとんでもないことに巻き込まれちゃったよ……。けど何でかな？不思議と嫌な感じはしないんだ……。やっぱり、この劉備って娘が、父さんや？世に少し似ているからかな？もしかしたらボンゴレ十一代目を継ぐことは出来ないかもしれないけど……。俺はこの世界で出来ることを精一杯やろうと思う。とりあえずまずは、この世界のことを知る必要があるな）」

「へえ……」

俺の目の前には一面に広がる桃色の世界があった。

「これが桃園か……すごいねー」

そう、俺たちは今、あの有名な桃園に来ている。と言うのも、先ほど寄った村の店で俺たちは今後をどうするか話し合っていた。そこで俺が、「どこかの太守に知り合いがいればな……」と呟くと、「あっ！そういえば白連ちゃんがこのあたりの太守に赴任するって言った！」と劉備が言ったときはそれはもう愕然とした。すでに使えるコネがあったのにそれを忘れていたのだからな。とまあ、そんなこともあったが、その店のおかみが俺たちの話を聞いていたようで、応援してるよと言ってくれた上に、門出祝いだと言って酒もくれた。そして俺たちはおかみに教えてもらったこの桃園で契りをを交わそうという事になった。

「美しい……まさに桃園という名にふさわしい美しさです」

「ああ……御苑の桜みたいだな」

「ほお……ご主人様の居た天にも、やはりこれほど美しい場所があったのですか。」

あと、何故か俺の呼び方がご主人様に変わった。やめてくれと言っても全然聞いてくれないのもう諦めたが、まだ慣れない。

「咲いていたのは、桜だけだな」

だが、ボンゴレ主催の花見で、あのリボンが簡単に花見をさせてくれるわけがなく、色々大変な目にあっただが、今は語るまい。

「雅だねえ」

俺たち三人で風雅を楽しんでいると、

「さあー！酒なのだあ！」

わくわくした表情を浮かべた張飛が、俺の周りをクルクル走り回る。

「……約一名、ものの雅も分からぬ者も居るようですが」

「あははっ、鈴々ちゃんらしいね」

「まあいいだろ。お前ら、準備はいいか？」

「うん！」

「はっ！」

「いいのだ！」

三人がそれぞれ返事をしてくる。手に持った盃にお酒をそそぎながら

「にしても、まさかあの有名なシーンに同席するとはな」

「どうかしたの？ご主人様」

「いや、なんでもない……」

「それより、お兄ちゃん」

「ん？」

「お兄ちゃんは鈴々達のご主人様になったんだから、ちゃんと真名で呼んでほしいのだ！」

「……真名？」

「我らの持つ、本当の名前です。家族や親しき者にしか呼ぶことを許されない、神聖なる名……」

「その名を持つ人の本質を包み込んだ言葉なの。だから親しい人以外は、たとえ知っていても口に出してはいけない本当の名前」

「だけど、お兄ちゃんになら呼んで欲しいのだ」

「真名、ね……」

なるほど、劉備や関羽が呼び合っていたのはその真名だったってことか。誰でも呼べるわけじゃない、特別な名前か。

「わかった。じゃあ、その真名を教えてください」

「我が真名は愛紗！」

「鈴々は鈴々なのだ！」

「私は桃香！」

「愛紗、鈴々、桃香……」

それぞれの真名を呼びながら、まっすぐに見つめる。

「俺は自分が何のために此処にいるのか、正直まだわかっていない。だけど、お前らの見せてくれた強い“覚悟”。それに俺は全力で応えてみせる！だから、これからよろしく」

「じゃあ、結盟だね！」

「ああ！」

そんな俺をみていた愛紗が、掌で包んでいた盃を、空にむかって高く掲げた。

「我ら四人っ！」

「姓は違えども、姉妹の契りを結びしからは！」

「心を同じくして助け合い、みんなで力なき人々を救うのだ！」

「同年、同月、同日に生まれることを得ずとも！」

「願わくば同年、同月、同日に死せんことを！」

「……乾杯」

カチンッ

“ 桃園の誓い ”

こうして、俺、沢田家宣の平行ワールドでの過酷なる戦いが…
…始まった。

く
く
く

趙子龍

家宣 side

桃園で結盟した俺達は、公孫贄の本拠地へと向かい、街の中でしばらく情報収集を行った。というのも、相手は今の俺達よりも遙かに上の立場にいる。そこへ、友達だからとズカズカ行った所で足元を見られるだけだと思ったからだ

まず、相手が何をしようとしているのか。そして、それに対して俺達は何を提供できるのかを見極めなければ、力を利用されるだけの。ただの便利屋で終わる確立が高いしな。

相手の欲するものを効果的に提供する。そして結果を残して、自分の評判を高めていく。これが今の俺達の基本方針だ。

桃香の友達には悪いが、利用できるだけさせてもらおう。

「と、いうわけだ」

食事所で昼食を終えたあと、くつろいでいる三人に向かって俺は今後の活動方針を伝える。

「一通り情報を集めたところ、この辺りに巣くう盗賊の規模は、約五千人と云ったところだと分かった。それに対して公孫贄の軍は約三千人……いくら相手が雑軍でも、この差は結構大きなものだろ。そこで、最も重要になってくるのが、舞台を率いる隊長の質だと思っただが」

「確かに。公孫贄殿の兵といっても、大半は農民の次男や三男などですからね。兵の質としても五分五分。となれば兵を率いる者の質こそが最重要でしょう」

「そういうことだ……そこで、愛紗と鈴々には兵を率いてもらいたいんだが、愛紗たちって兵を率いた経験ってあるか？」

「無いのだ!」

「そうか……」

「でもねでもね、ご主人様、愛紗ちゃんに鈴々ちゃんなら、兵隊さんたちを上手く率いることが出来ると思うよ?」

「ああ。それは俺も思ってるし、確信も持ってる」

何せこの二人は“アノ” 関羽に張飛なんだからな。

「だが、俺達がそう信じていたとしても、現状では兵隊のいないただの腕自慢っただけなる」

「うっ……それはそうだよなぁ……。でも、じゃあどうすれば良いんだろ？」

「簡単なのだ！ 公孫贄のおねーちゃんの所へ行くときに、兵隊を連れて行けば良いのだ！」

桃香の疑問に鈴々が答える。

「その通りだ。少数でも良いからとにかく兵を率いて合流するってことが最重要だからな。つー訳で、俺達は俺達で義勇兵を募った方が良いと思うんだが、みんなの意見はどうだ？」

「それはもちろん、異論はありませんが……。だけど一体どうやって？」

俺の質問に愛紗が質問し返す。

「方法はある」

「さっすがご主人様！ それでそれで？ どんな案なのー？」

「金で雇う……しかないな」

「でも鈴々たちにはお金は無いのだ」

「問題はそこなんだよなあ。さて、どうやってお金を集めるか……」

売ってお金になりそうなものと言えば、俺の持ち物ぐらいか？

「うーん」

俺は持ってきた荷物をゴソゴソと探る。中に入っているのは……

・七つのボンゴレリング

- ・Xグローブ
- ・いくつかの匣兵器
- ・ボールペン等の筆記用具
- ・非常食（乾パン・チョコ）

これくらいだな。リングと匣は論外として、あとは筆記用具と非常食か……よし。

「これなら良い値が付くだろ」

俺は鞆の中から三本のボールペンのうち一本を取り出す。全部売っちゃっても良いけど、後のことを考えて、一本だけにしておくか。これだけでも充分な金になると思うし。

「これは、何ですかご主人様？」

「ボールペンって言ってな、文字を書く道具だ。墨を使わないで書けて便利だぞ」

俺は桃香達に説明しながら、ボールペンで文字を書いて見せる。

「すっごーい！文字が書けてる〜！」

桃香達は物珍しそうな目で見てくる。

「どうだ？これを実演して売りに出せば結構な値段で売れないか？」

俺は桃香達に問いかけた。

「はい。これほどのものならば、良い値段を付ける好事家も居るところでしょう」

「じゃあ私が売ってきてあげるー！！」

「いえ。桃香様や鈴々が行けば足元を見られるでしょう。私が行きます」

「えー。……ぶーぶー」

「まあ、桃香は駆け引きが出来そうにないしな。それじゃあ、愛紗。売るのは愛紗に任せた。頼むぞ」

「御意。お任せください」

にっこりと笑ってボールペンを受け取った愛紗が小走りに外へと出て行った

それから数時間後。

俺達の前にはずらりと人が並んでいた。

「おーおー、随分と集まったもんだ」

俺は目の前の人を見て言葉を漏らす。

「ご主人様から預かったぼうるペンが、破格の値をつけてくれましたからね。百人ほど集めることが出来ました」

ほう、そこまで売れたのか。少し残しておいて正解だったな。

「それだけ居れば充分だろ。さてと、じゃあ行くか！」

俺の号令とともに、俺たちは公孫贄の城へと向かった。

兵士たち千人を連れて城を訪ねた俺達は、門前でしばらく待たされたものの、下にも置かない扱いで玉座の間へと案内された。

「ここまででは計画通り……だな」

俺達は、侍女らしき女性の誘導に従って、玉座の間へと足を踏み入れた

玉座の間

「桃香！ ひっさしぶりだなー！」

「白蓮ちゃん、きゃー！久しぶりだねー」

「瀧植先生のところを卒業して以来だから、もう三年ぶりかー。元気そうで何よりだ」

「白蓮ちゃんこそ、元気そうだね それにいつのまにか太守様になっちゃって。すごいよー」

「いやあ、まだまだ。私はこの位置で止まってなんかいられないかな。通過点みたいなもんだ」

「さっすが秀才の白蓮ちゃん。言うことがおつきいなー」

「武人として大望は持たないとな。……それより桃香の方はどうしてたんだ？ 全然連絡がとれなかったから心配してたんだぞ？」

「んとね、あちこちで色んな人を助けてた！」

「ほおほお。それで？」

「それでって？それだけだよ？」

「……………はぁ……………っ！？」

公孫贇は桃香の答えを聞いて叫びを上げる。

「ひゃんっ！？」

「ちょっと待て桃香！あなた、先生から将来を囑望されていたぐらいいなのに、そんなことばっかやってたのっ！？」

「っ、っん……………」

桃香は公孫贇の問いに頷く

「どうして！？桃香ぐらいの能力があったなら、都尉ぐらい余裕でなれたるうに！」

「そうかもしれないけど……でもね、白蓮ちゃん。私……どこかの県に所属して、その周辺の人たちしか助けることが出来ないっていうの、イヤだったの」

「だからって、おまえ一人が頑張っても、そんなの多寡が知れてるだるうに……」

「そんなことないよ？私にはすごい仲間たちがいるんだもん」

そう言つて、桃香は俺達を見て笑みを浮かべる

「仲間？」

それまで桃香と話しっぱなしだった公孫贄が、ようやく俺たちの存在に気付く。

「桃香が言っているのはこの三人のこと？」

「そつだよ。んとね、関雲長、張翼徳、それに管路ちゃんお墨付きの天の御使い、沢田家宣さん」

「管路？管路ってあの占い師の？」

「うん 流星と共に天の御使いが五台山の麓にやってくるって占い、白蓮ちゃんは聞いたことない？」

「聞いたことはある。最近噂になっていたからな。しかし眉唾物だと思っていたけど……」

「そんなことないよー！家宣さんは本物だよ！」

「ふーん。……」

「何だ？」

つま先から頭までジロジロと俺を観察するようじに見てくる公孫贊。

「あー！白蓮ちゃん、私のこと疑ってるのー!？」

「いや、まあ桃香がいうんだから本当だろ」

まあ確かに桃香はウソをつくようなヤツには見えないよな。

「ま、御使いかどうかはさておき、一応桃香と一緒に行動させてもらっている沢田家宣だ。よろしく」

俺は自己紹介をして、公孫贄に手を差し出す。

「そうか。桃香が真名を許したのならば、一角の人物なのだろう。……ならば私のことも白蓮で良い。友の友なら、私にとっても友達からな」

「わかった。改めてよろしく、白蓮」

「宜しく頼む」

そう言って俺と白蓮は握手を交わした。

「で、だ。桃香が私を訪ねてきたのは、旧誼を暖めるためだけでは無いと思うけど……本当の用向きはどういうんだ？」

改めて言いながら、白蓮は桃香の方へ向き直った。

「うん。白蓮ちゃんのところまで盗賊さんを退治するために義勇兵を募っている話を聞いて、私たちもお手伝いしようかなと思って」

「おおー！ そうか。そうしてくれると助かる。兵の数はそれなりに揃っているが、指揮できる人間が少なくて、悩んでいたところなんだ。聞くところによると、結構な数の兵を引き連れてきたくれたらしいけど……」

「あ、う、うん！たくさん居るよ、兵隊さん！」

「そうかそうか。……で？」

「で、でって何かな??」

「本当の兵士は、いったい何人ぐらい連れてきてくれているんだ？」

「あ……あう……」

……なるほど、白蓮にはお見通しってわけか。

「ふふっ、桃香の考えていることは分かる。だけど私に対してそういう小細工はして欲しくないな」

「あう……バレたんだ……」

「これでも太守をやっているんだ。それぐらい見抜く目を持っていないと、生き残っていけないさ」

伊達に太守をやっているわけじゃないってことが。

「ご名答だ、白蓮。俺たちが連れてきた兵士全員は金で雇った村人だ。すまなかったな、騙すようなマネをして」

「そうか。いや、気にはしていないから良いさ。私だって、桃香と同じ状況なら、そういう作戦を立てたと思う。だけど友としての信義をないがしろにする者に、人がついてくることは無い。……気をつけるよっ」

「なるほど、赤心を見せる相手を見抜く目を養えってことか」

つまり、人には人の利益があり、人の都合がある。それを見抜き、なおかつ相手の人となりを把握すること。そして胸襟を開ける相手なら、全身全霊で赤心を押し出す……。そう言いたいのだろう。

「まあそういうこと。……って、ちょっと待て沢田。お前今、『兵士全員』って言ったか？」

「……ああ。桃香と一緒に行動しているのは俺たち三人だけだ」

「その後ろの二人か？」

白蓮が視線を愛紗と鈴々に移すと、二人は自己紹介を始める。

「我が名は関羽。字は雲長。桃香様の第一の矛にして幽州の青龍刀。以後、お見知りおきを」

「鈴々は張飛なのだ！すつごく強いのだ！」

「う、うーん。……宜しく頼む、と言いたいところだが、正直に言うと、二人の力量が分かんらん」

うーんと唸りながら愛紗たちを見つめていた白蓮の後ろから……

「人を見抜けと教えた伯珪殿が、その二人の力量を見抜けないのは話しになりませんな」

毒を含んだような言葉と共に、一人の少女が姿を現した。

「むう……そう言われると返す言葉も無いが、ならば趙雲はこの二人の力量が分かるとでも言うのか？」

趙雲？こいつがああ趙子龍か。

「当然。同じ武を志す者として、姿を見ただけでこの二人が只者でないことぐらいは分かるというもの」

趙雲は愛紗と鈴々を見て喋る。

「へえ〜……まあ星がそういうならば、確かに腕が立つんだろっな」

「ええ……しかし……」

言葉を区切って、趙雲が俺に視線を向ける。

「この方からは二人以上の力を感じます」

「……………なんのことかな？」

「惚けても無駄ですぞ？目を見れば分かる。おそらく貴方は私たち以上の数多くの修羅場を潜り抜けているでしょう？」

……………そこまでわかるのかよ。

「流石だな、趙子龍……………」

「……………っ！？ほお。やはり油断ならぬ人のようだ。我が字をいつお知りになった？」

あ、ミスった。

「まあ、あれだ。天の御使いの知識……………ということにしておいてくれ」

「ほお……………噂を聞いたときには眉に唾して聞いていたが、まさか本

物の天の御使いに出会おうとは「

「本物かどうかは俺だってわからん。ま、神のみぞ知る……ってとこか」

「ふむ。……ふふっ、おもしろいお方だ。どうです沢田殿？よろしければ、私と手合わせなど？」

……何故この話の流れでそうなる？けどまあ、丁度いいか。

「俺も最近、身体を動かしてなかったからな。相手になってくれるか？」

「ええ、もちろん」

と、俺と趙雲がそんな話をしていると……

「お待ちくださいー！」

ここで愛紗のちょっと待ったコール。

「どうした愛紗？」

「ご主人様、私もご主人様と手合わせ願います！」

「あー！ズルイのだ愛紗！鈴々もお兄ちゃんと戦いたいのだー！」

と、なんと愛紗と鈴々も戦いたいと言ってきた。

「ふむ、妙なことになってきましたな。どうします、沢田殿？」

「うーむ……」

俺はしばらく考え込み、そして……

「一人ずつはめんどくせえし、三人いっぺんに掛かって来い」

「」「」「？」「」

俺がそう言つと、愛紗たちは驚きの表情を浮かべた。

「……ほお。沢田殿は我ら三人を相手にしても勝てる自信がある
と?」

「あるから言ってるんだ」

「本気ですか?ご主人様」

「男に二言はねえ」

「じゃあ、鈴々たちでお兄ちゃんを倒すのだ!」

こうして、俺VS関羽・張飛・趙雲の戦いが決まった。

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4668s/>

真・恋姫†無双～大空の子供～

2011年10月9日17時25分発行